忘不了－忘れ得ぬ日々

自分が台湾によく行っていたのは昭和五十二年から五十四年にかけてだった。当時は海外旅行の行き先というと、台湾や韓国が盛んだった。フィリピンは、マルコスさんが大統領になって「フィリピンにいらっしゃい」と言うようになってから、マニラまで遊びに行く日本人や、日本国内でもフィリピン・パブが急に増えてきたけれども、自分はもっぱら台湾一筋だった。当時「台湾に行く」といったら、「いかがわしいことをしに行く」と思っていた人が多かった。事実その通りで、当時は阪急交通社の若い子が「とっておき観光」と言いながらムフフなツアーを個別で組んでくれていた時代で、自分も接待だとかなにかと理由をつけて「別嬪さんの多いところ」をお願いしたことがある。今でこそ台湾は女子旅と言われているけれども、つい最近までは台湾は女子供の行くところではなくて、実際、大きなニュースにならないレベルの碌でもない事件 －たとえばホテルで財布をすられたり、ヤクザが出てきておどされたり－ はしょっちゅう起こっていた。

当時はまだ関西空港も桃園空港もできていなくて、伊丹から松山空港まで中華航空や日本アジア航空が飛んでいた。中国からクレームが来るというので日航機は台湾に飛行機を飛ばせなかったし、ジャルパックもなかった。代わりに、日航は日本アジア航空というトンネル会社を作っていて、ジャルパックも台湾行きだけは別の名前だった。要は建前と本音を使い分けていたということやな。

松山空港から台北市内まではとても近かった。空港に降りると、果物の腐ったような匂い －自分はこれを「台湾の匂い」とよんだ－ がして、とにかく異国に来たような気分になった。もっとも台湾人に言わせると「日本は味噌の匂いがする」といっていたから、街にはそれぞれの匂いがあったということだろうか。ところが昭和五十四年に、台北市内から離れた辺鄙なところに中正空港（※現在の桃園空港）ができて、台北までえらい遠くになった。中正というのは蒋介石さんの名前で、アメリカのケネディ空港の真似みたいなことしよるんやと思ったことがある。

自分の父親や母親の世代には蒋介石さんの人気はすごく高くて、終戦後の玉音放送を聞いたあとで、蒋介石さんが「徳をもって怨みに報いる」と言ったもんやから日本人は感激して、中国にこんな立派な人格者がいたんやと思ったけど、ところが占領した台湾では戒厳令が布かれていて、至るところで「共産主義撲滅」と言っていて、憲兵がいたるところで威張っていて、台湾人はこっぴどく痛めつけられていた。日本人観光客も似たようなもので、とにかく旅行は制限だらけ、警察の許可なしに阿里山には登れなかったし、カメラを首に下げて見知らぬところをうろうろしているだけで、あとで憲兵がホテルまですっ飛んできた時代だった。憲兵は戦後に大陸から来た中国人たちで、台湾人とちがって日本語はしゃべれなかった。ただ、がんばって日本語を勉強したのもいたらしく、片言の日本語で「タイホ」「ケイムショ」とまくしたてられて真っ青になった知り合いがいた。だいぶあとになって自分は李登輝さんの本を読む勉強会に行ったとき、日本が去った後の台湾は、賄賂・でっちあげ・裁判なしでの死

刑といったひどい闇の島になっていて、表向きの場所で「共産主義撲滅」「大陸を取り戻せ」以外の政治の話は絶対禁止ということを聞かされた。あと、最近の日本の右翼会議（日本会議）の連中は「日本精神」などといって台湾人をもてはやしているけれども、当時の台湾人の公衆マナーはとても悪かった。道端にツバは吐く、列車に並ばない、こんなことはしょっちゅうで、要は上が無茶苦茶なことをしていたから下まで悪くなったということやろな。

当時の台湾旅行の記憶というと、特にカメラを扱うときは注意するように言われた。空港は絶対に写真撮影禁止、飛行機や橋にカメラを向けるのも禁止、総統府を近くから撮るのも禁止、とにかく禁止だらけだった。エックス線検査の放射線もきつくて、フィルムは鉛の袋に入れておかないとすぐにやられてしまった。あの頃はスマートフォンもデジカメも、「写ルンです」すらなかった時代で、カメラを盗られたりしたら今度は嫁さんに殺されるからいつも身につけていたし、当時は現像代も結構高かったから気楽に撮れなかったし、台湾で現像したら少しは安くなると聞いたけれども、風のうわさで全部検閲が入ると聞いたことがあったし、ナニ（と言いながら、人差指と中指の間に親指を入れる仕草をする）なんてのは撮れなかった。為替レートは、円とドルがぐちゃぐちゃしていたこともあって行くたびにレートが変わるのはしょっちゅう、当時はクレジットカードも少なかった。初めて台湾に行くときはトラベラーズチェックを勧められたけれども、結局台湾では日本円も使えると聞いたので使うことはなかった。当時台湾に行く目的はだいたいナニとかゴルフとかで、日本円で何十万と持っていった人は多かった。腹巻に入れていたはずのお金がなくなった話はよう聞いたけど、でもいかがわしいところで遊び過ぎてすってんてんになってしまったというのが本当のところやろな。

当時は中年以上の台湾人は日本語はだいたい理解できた。日本語をまったく理解できないのは大陸から渡ってきた外省人か、「キョウサンシュギ、ボクメーツ！」の教育を受けた若い子くらいで、台湾の旅で言葉に苦労することはなかった。もっともあれから四十年も経っていて、今はもう日本語の世代がほとんどいなくなって、状況も大きく変わっていったけれども。

松山空港から台北市内へは差回しのリムジンに乗ったけれども、外の景色を見ていても、あんまりぱっとしてなくって、街が発展しているという印象はなかった。街じゅうがスローガンだらけで、あと、道にせり出すくらいのたくさんの南国の果物が至るところで売られていて、小さな食べ物の屋台があって、自転車の人力車があったのを覚えている。韓国と違って、看板は漢字で書かれていたので何とはなく読めた。映画の看板がやたらと大きかったり、松下が「ナショナル」なのに「国際」と書かれていたのは面白かった。印象的だったのは劍潭山の真っ赤なホテル・圓山飯店。中国風のキンキラキンのホテルで、宋美齢さん（蒋介石夫人）が経営しているのだという説明をガイドから何度も聞かされた。ただ自分はそこに泊まることは全くなくって、だいたい国賓や六福、あと北投温泉で、台北以外だったら礁渓温泉くらいだった。

今でこそ台北観光というといろんな遊びがあるやろうけれども、自分は龍山寺や孔子廟に興味はなかったし、商場や夜市というのにもやはり関心はなかった。九份へ観光なんてのはもってのほかという時代だった。当時の九份には鉱山くらいしかなかったらしく、仮にこんなところに観光客が行ったら憲兵にしょっぴかれるのがおちやろな。だから、台北といえばゴルフと故宮博物院、そしてナニだった。女子供の行くところとちゃうやろ？

礁渓温泉は、台湾の東海岸（宜蘭県）にある古い温泉で、駅員に「ショーケイ」と言っても普通に通じた。台北から特急に乗って行ったけれども、特急の名前までがスローガン（自強号）で笑ってしまったことがある。途中紀伊半島みたいに海沿いを走っていくところがあって、海沿いに大きな島（亀山島）が見えてきて、同乗のガイドはさらにその東には与那国島があって天気のいい日は見えることがあると言っていた。当時のガイドは、日本語が単に達者なだけでなく、共産党の悪口になると日本人より流暢な日本語で喋っていた。礁渓温泉の近くに「サヨンの鐘」（※戦前、出征する恩師を見送るために宜蘭在住の高砂族の少女が遭難したことから、彼女をたたえるために設置された鐘）で有名になったところがあって、初めて台湾に行こうとしたときに母親が教えてくれた。でも台湾でこの話をすると、やつらは「サヨンは日本帝国主義の犠牲者」などと言いたいことをいろいろ言っていた。政治的にそう言わなければならないんやろけども、まあご苦労さんやね。

礁渓温泉は駅前にあって、便利な立地は大阪の山中渓と似ていた（※当時大阪府山中渓には温泉があった）。我々は大抵「観光ホテル」というたぐいのところに泊まった。一般の台湾人は立入禁止にはなっていなかったけれども、料金がべら棒に高いので日本人しか行かないと言っていた。ここに「大陸を取り戻せ」という看板があったかどうかは覚えていないけれども、変てこなカタカナやひらがなが書かれている看板があったのは台湾らしかった。ナニするのは同じやけど、宴会場では丁半賭博のようなものまでやっていた。ただ、お金を賭けるのではなく、負けたほうが脱衣するというやつだった。日本の脱衣野球拳をパクったんやろな。あと、これは礁渓温泉だけではないけれども、台湾には観光散髪屋（観光理髪庁のこと）というのもあって、お姉ちゃんが裸で散髪してくれるサービスもあった。一度だけやってもらったことがあって、ひげを剃ってもらう前におっぱいを顔にあてられたけど、センエン・センエンと何度も言われて元の世界に戻された。台湾では「観光」という言葉は「いかがわしい」と同じ意味やな。今では観光と言ったらかっこええように思わせるけど、要は、ナニや。

（頭城・宜蘭・羅東・蘇澳など、宜蘭にあるいくつかの街の名前を挙げ、行ったことはないかを聞いてみたところ、）自分が台湾で仲良くしていたお姉ちゃんが羅東出身だったからいくらか話を聞いたことはあるけれども、当時はどこにも行ったことはない。（頭城などは老街とよばれるレトロな町並みで知られているあることを説明すると、）今でこそレトロと言ってもてはやしているけれども、当時は観光地以外のところに行くとスパイ行為の疑いで憲兵にしょっぴかれる時代だった。仮にそういったと

ころへ行って旅情を感じようとしても、第一、台北のあたりでも男はパンツ一丁か、シャツを着ていてもお腹だけ出して外をうろうろしているのがいっぱいいて、とにかく見苦しかったし、女も熊やカバみたいなのばっかりだった。宜蘭については、礁渓温泉から半時間で行けるということを聞いたことがあったけれど、ただ、台北でもあまりぱっとしなかったから、さらに行く気はしなかった。だいぶあとになって宜蘭のことを調べてみたら西郷隆盛さんの息子が初代県長さんをしていたとのことだったが、たったそれだけの理由でわざわざ足を運ぶかどうかはわからないし、また宜蘭餅というお土産の話を聞いたけれども、ハワイのマカダミア・ナッツみたいな名物でもなさそうやし、餅のくせに生地が薄っぺらくてすぐグチャグチャに砕けてしまうから、それやったら神戸で洋菓子を買うほうがいいんとちゃうかと思ったりもした。台湾のお土産というと今でこそパイナップル・ケーキと烏龍茶だけども、当時空港や新東陽で売っていたかどうかははっきり覚えていないし、買わんかったところからすると、だいたいそんなに美味しそうにも見えなかったということで、だいたい台湾のお土産というと免税店のウイスキーとかタバコの時代だった。

蘇澳には蘇澳冷泉というのがあった。外国の観光客に開いているところではなかったらしいし、「温泉マーク」もなかったと思う。蘇澳は花蓮への乗換えで使うから（※当時、北廻線は全通していなかった)、もしかすると行ったことがある人がいるかも知れない。このへんは台北で仲良くなったお姉ちゃんから教わったけれども、蘇澳の冷泉は炭酸でできていて、サイダーが飲み放題と言っていた。「温泉マーク」はなかったというのも台湾のお姉ちゃん情報（笑い)。でも、仮にあったとしても、台湾人の素人さんはさっきも言ったように熊やカバみたいなのが多かったから、期待できるかはどうなんやろな。（この冷泉は和歌山の人が開いたことを説明すると、）すごいね。

町のなかでは、選挙カーみたいなのがターッと走っていたことがあって、車の上に乗っていた姥桜がチラチラ前を見せているのを見たことがあって度肝を抜かれた。これが台湾の葬式と聞いて更にびっくりした。あと、到るところでビンロウを噛んで野糞みたいに捨てている台湾人を見て引いたこともある。（現在の宜蘭は、絵本作家・ジミーリャオの聖地になっている話を説明すると、）台湾人ってのはとことん現実的やけど、人間ってたまにロマンとかメルヘンを求めるところがあるし、そもそも台湾人はフリーセックスではなく、恋愛の考え方がとてもピュアで、だから一回惚れたりしたらちょっと厄介なことになるんやろなと思った。自分も台湾一筋だったのも台湾人のそういうところにキューッとなったところがあるんやろな。でも、ときどき片思いのもつれでとんでもない事件が起こることがあったり、すってんてんになって破滅したのもいてると聞いたけども。

これは台北の話だけども、林森路の盛り場には日本直輸入の最新カラオケ機が入っているところがあった。当時の台湾は晩御飯を食べながら生歌を聴けるところがたくさんあって（※歌庁を指す)、バ

ーやキャバレーでもピアノなり楽器なりの生演奏が入っていたけれども、日本人客相手に台湾の歌を歌っても「帰れ」になるから、いろいろと工夫していたんやと思う。日本から直輸入したカラオケ機にカードリッジを差して、「長崎は今日も雨だった」を歌うお姉ちゃんが多かった。自分が行っていたときは、南国なのになぜか「津軽海峡・冬景色」や「北国の春」が流行っていて、よくお姉ちゃんとデュエットで歌っていた。ときどき男声のお姉ちゃんもいたから、台湾にはおかまもおるんやと思ったことがある。台湾の男声のお姉ちゃんはカルーセル麻紀がモロッコで性転換手術をした話を知っていて、「デモアタシ、ムスコ、キレマセン」と言っていたのは覚えている。日本で流行していた山口百恵やピンクレディの歌は知らないと言われたし、テレサ・テンもそんなに人気はなかった。台湾でテレサ・テンの人気が出たのはもう少ししてからで、当時は偽パスポート事件のせいで印象は良くなかった（※テレサ・テンはインドネシアのパスポートを使い日本に入国しようとして国外退去処分となったことがある)。当時はオーヤン・フェイフェイのほうが知られていた。

行きずりの相手だとシャワーを浴びている間に財布をすられたりするから、自分はだいたい決まったお姉ちゃんか、紹介の人とで、一晩で一万円（日本円）が相場だった。ちなみに礁渓温泉の場合は汽車代とホテルを入れて三万円から。自分にはねんごろになったお姉ちゃんがいて、彼女は当時二十五歳、自分のことを「百恵（モモエ)」と名乗っていて、自分は「百恵ちゃん」とよんでいた。台湾人の喋る日本語はたいてい語気が強いけれども、百恵ちゃんはとても可愛げのある喋り方をしていた。羅東出身の六人きょうだいの長女で、家族が病気がちだったのでこの世界に入ったと言っていた。どこまでが本当なのかわからないけれども。自分は百恵ちゃんにはいろいろ思い入れがあって、一度美顔器をプレゼントしたことがあって、嬉しそうにしていたけれども、でも、やっぱり現金のほうがよさそうやった。言葉がうまく通じなくてもなんでも顔に書いていたから、とにかく正直な子やった。宜蘭に礁渓温泉があることを知って、お勧めはないかと聞いたら、礁渓温泉はプロが多いから気をつけてねと言われたことがあるけど、百恵ちゃんもプロなんとちゃうんかと言いそうになってやっぱりやめた。

百恵ちゃんとは海鮮のレストランでデートしたことがあって、いろんなのを焼いてもらったりアーンしてもらったりして、とても楽しかったかなあ。

あともうひとつ、台北の新公園（※二二八和平公園）にはホモが集まっていた。新公園は台北駅から歩いて十分とかからないから、台湾じゅうから集まっていたと思う（※当時北廻線は開通していなかったので、花蓮や台東から台北に鉄道で直接行くことはできなかった)。確かに、天王寺公園や岡公園（※和歌山市和歌山城南側にある公園）でも夜になると触りあっているという話はよく聞くから、一度肝試しに行ってはみたけれども、まだエイズが流行していない時代で確かに皆んな結構激しかった。自分はそっちにほとんど興味はないから「見てるだけ」だったけれども。国府の連中は政治方面には厳しいけれども、ホモさんにはさほどきつくはしていなかったんかな。そもそもどっちでもよかったん

やろな。それからこれはまた聞きになるけれども、高雄にも、台中にも、同じような公園があると言っていて、台湾の男は皆んな軍隊に入っていて日本人よりも鍛えているから、若い子と遊ぶのはたまらんのやと。

日本のホモさんは台湾や台湾人のことが好きと言っているけれども、遠くまでわざわざないものをねだって探さんでもええと思う。台湾や台湾人は別にあんたらのことが好きというわけとちやうし、そもそも縁というものは、近くにいくらでもあるもんやから。

自分は昭和五十五年に子供ができてから台湾に行かなくなった。今考えてみると青春の熱病みたいなものやったんやろけど、その後だいぶして古希祝いを兼ねて台湾に行ったときにはすでに売春は禁止されていた。（了）

追記　自分には子供（娘と息子）が二人いて、二人には台湾の話はまったくせんかったけども、二人とも大人になって台湾が好きになった。台湾に行く前にはウォ・アイ・ニーとかボーポーモーフォーの練習はしてたし、お土産のパイナップル・ケーキは毎回別のところで買ってくるし、烏龍茶も銘柄のついた高いのを選んでるみたいやった。Ｓちゃん（娘の本名）から「北投温泉でエステしてきた」という話を聞いたときは、あんなところに女の子でも行けるようになったんかと本当にびっくりした。あと、台湾人は熊かカバみたいなんばっかやと言うと、顔を真っ赤にして「イケメンも多い」と反論してきた。Ｓちゃんはだいぶ前に結婚して子供も二人いて、中学のお受験で頑張ってるけど、Ａ（息子の本名）のほうはＬＧＢＴらしくて、台湾人の「友達」をしょっちゅう家に連れてきていた。お姉ちゃんには「彼氏」と言って紹介してたみたいやけど、親にはやっぱり言えんのやろな。でも、わかってるんやけどな。まあ、孫の顔を見たかったら子供は二人は作っておくもんやと思った。

あと百恵ちゃん。百恵ちゃんは、あのあと金持ちの台湾人と結婚したけども、結局離婚して、羅東に帰って、そこで台湾独立の運動に入って、そこで知り合った人と再婚した。再婚相手は自分の知ってるようなかおかたちの台湾人やった。なぜそこまで知ってるかというと、百恵ちゃんの本名を覚えてたんで、十年ほど前にフェイスブックで名前を打ってみたら、なんと検索に出てきた。懐かしくなって駄目もとでメッセージを打ってみたら、一時間も経たないうちに日本語で返事が来たんで、とてもうれしかった。あれからいいねしたり、メッセージもやりとりして、古希祝いで久しぶりに台湾に行ったときに台北で会ったんやけど、自分はもうおじいちゃんやのに百恵ちゃんはそんなに変わってなくってびっくりした。このとき連れてってくれたのが当時デートした海鮮の店で、海覇王って名前やった。

百恵ちゃんは二年前に膵臓がんで亡くなってしまった。葬式は行かんかったけど、台湾では葬式でストリップする習慣はもうなくなっていたらしい。

（令和元（二〇一九）年七月聞き取り／追記部分は令和二（二〇二〇）年八月の聞き取り）